

海外舞踊文献紹介

ダンス・セラピー（ドイツ語圏）

本稿では、1980年代から今日までにドイツ語で出版されたダンス・セラピー関連の文献の一部を紹介する。アメリカからの紹介を目したものを含め、とくにドイツ語圏での先駆と呼ばれたものを取り上げた。

ドイツ語で出版されているダンス・セラピー文献は、日本語文献とは比べ物にならぬほど数多いとは言え、今のうちなら網羅できるかもしれないくらいの出版数である。出版される文献には、領域の成長度合いを反映して、さほど細分化できる種類がない。つまり総説、事例をもとにした啓蒙書、指導法紹介がほとんどを占める。歴史研究（個人研究）、他領域との境界研究などもありはするが、十分な下地と量は無いと感じられる。

1) Trudi Schoop,...komm und tanz mit mir!, Pan Verlag, Zürich, 1981

1974年にアメリカで出版された、ダンス／ムーブメント・セラピー創始者のひとりであるトゥルーディ・シュープ(1903-1999)はスイスに生まれ、戦前はヨーロッパで舞踊劇団を率いていた。著 "won't you join the dance? Mayfield Pub.," は、1979-1981年にはドイツ語で出版されている(日本では平井タカネ他訳により「からだの声を聞いてごらん? ダンスセラピーへの招待」として1988年に紹介された)。シュープは、もう一人の創始者マリアン・チェイスが東海岸で独自の活動をはじめたのと前後して西海岸でダンス／ムーブメント・セラピーをはじめた。シュープはスイス出身で、舞踊劇団を率いて長くヨーロッパで活動していた。

チェイスは当初からダンスマガジンなどに寄稿していたようだが、成書の形ではこれまでのところ公には和訳も独訳もされていない。これに対して、シュープの本書は日独両国でほぼ最初にダンス・セラピー専門書として発行されている。

セラピストとして患者と出会ってゆくプロセス、そして当然患者たちの変化のプロセスを、平易な表現で、自然な流れで紹介してゆく。注目したいのはセラピスト自身の変化のプロセスについても触れられていることで、他には見られない特徴である。これらのストーリーに編み込まれるように、ダンス・セラピーの構造、治療機序も無理なく説かれてゆくので、導入／紹介書として支持される

ことが納得できる。

2) Liljan Espenak, Tanztherapie; durch kreativen Selbstausdruck zur Persönlichkeitsentwicklung, Sanduhr Verlag, Dortmund, 1985 (org: Dance Threpy; Theory and Application, Charles C. Thomas Pub., Springfield, 1981)

エスペナク(1906-1988)は最初期のヴィグマン舞踊団の一員であった経歴を持つ。第2次世界大戦後にアメリカに渡ってダンス・セラピー草創期から活躍した。本書は上記のようにアメリカで出版されたものを、エスペナク本人がドイツを訪れた折に翻訳による出版が決定した。

彼女はアドラー派心理学、ローウェンのバイオエナジェティクスなどを取り入れた、心身のエネルギーの流れの関連づけと、エスペナク・ホイールとあとで名付けられた円運動やシングを中心としたバランス回復を意識化し実現する為のエクササイズにより、独特のダンス・セラピー理論及び方法論を構築した。シュープの一冊とともに、「ダンス・セラピーの古典」とも言うべきものである。前書きの一つをローウェンが書いている。

3) Fe Reichelt, Ausdruckstanz und Tanztherapie. - Theoretische Grundlagen und ein Modellversuch, Brandes & Apsel, Frankfurt, 1987

Fe Reichelt は、北京で幼少期を過ごしたあと1949年から1953年をベルリンのヴィグマンのもとで過ごした舞踊家である。舞台活動、舞踊教育活動を展開するかたわら、気功等の東洋体育、特に呼吸法を活用して独自のダンス・セラピー方法論を構築してきた。

本書の前半ではフロイトの自由連想法、ユングの象徴理論を土台に、夢が非常に独特の方式で自己の深層に沈んでいる様々な思いを意識化し、解消する力を持っているのと同様の働きをダンス、とくにインプロヴィゼーションに期待できることを説く。その際に呼吸は瞑想を導く大きな役割を果たす。

後半では、18~31歳の8人の参加者を抱えたグループの実践例の紹介をもとに、前半の理論編に解説を加えてゆく。特に具体的な疾病や問題を対象にしている。

1990年に出版された4) Atem Tanz und Therapie - Schlüssel des Erkennens und Veränderens, Brandes & Apsel, Frankfurt では自然運動と陰陽の呼吸法を結びつけた13のエクササイズ(Übung)が紹介され、これらの実践、習得により基本的感情質の表現、ひいては内的葛藤の表出への道が開かれるとする方法論に発展させている。5) Atemübungen-Wege in die Bewegung: Yin und Yang im Tanzentdecken, ,

Brandes & Apsel, Frankfurt, 1993 は、こうした Übung を、26のパターンにわたって、呼吸法、運動法、関わりのあるイメージ群とともに紹介している。

6) Cary Rick, *Tanztherapie; Eine Einführung in die Grundlagen*, Gustav Fischer, Stuttgart, 1989

シカゴ出身の Rick は独自の経験と方法論でダンス・セラピーを開発してきた。

50年代のアメリカ劇場モダンダンスになにか居心地の悪さを感じ、ウィーンに移ってベルリン時代の Wigman の弟子と出会う。若年の頃にクリニックで分析的心理療法を受けて来た経験をもとに、ある一定のレベルにある芸術的経験は、すでに自己分析的であるという考えを持ち、1970年代に自分の分析医とともに分裂病患者とのダンス・セラピー実践をはじめた。ドイツ・ダンス・セラピスト連盟とは別に活動を行っている

本書は最初に手短かに動きの中にある（心理的特性だけではなく、様々な）可能性とこれを解き放つこと、そしてこれを具体的体現するものとしてのダンスの関係を説明したあと、総ページの約30%を割いて、患者の動き、ダンスがどのように分析評価され得るか、あるいはされるべきかという問題を、記譜法とともに解説紹介している。これは治療計画を立てる上でも大変重要視されている。後半では、患者から出てきた具体的な動きや感情に対して、これをどのようにダンス活動の中で展開させてゆくことができるか、など具体的な進め方が示される。

7) Elke Willke (Hrsg), Gerd Holter. (Mitarbeiter), Hilarion Petzold (Mitarbeiter), *Tanztherapie - Theorie und Praxis: Ein Handbuch*. Junfermann, 1991

責任編集者 Willke は1980年代 *Tanztherapie Interessen Gemeinschaft* を創立。1984年 *Deutsche Gesellschaft für Tanztherapie* となる。1986年よりダンス・セラピスト養成を開始。以来、ドイツ国内をはじめスイス、スコットランド、アメリカで活動するセラピストを輩出してきた。 *Integrative Tanztherapie* を標榜している。

本書は教科書を意図して企画されている大部。導入部では Willke がダンス・セラピーの定義、発展とその背景を手短にまとめている。第一部では Wigman や Laban の文章を紹介し、 *Ausdruckstanz, kreativer Tanz* の本質と心理学的側面についての理解を深める場を提供する。第二部ではダンス・セラピーのバイオニア達によるダンス・セラピー論の紹介、第三～四部では編集者グループが標榜

するインテグレイティブ・ダンス・セラピーに関する研究論文を収録。

8) Karl Hörmann, *Durch Tanzen zum eigenen Selbst; Eine Einführung in die Tanztherapie*, Der Goldmann Verlag, München, 1991

音楽心理学者として出発している Hörmann は、ケルン体育大学を経て現在ミュンスター大学において、ダンス・セラピー研究所およびセラピスト養成講座の責任者である。1970年代にフライブルク大学で始まった音楽療法の講座が1974年にミュンスター大学の非公式な研究会として移って来て、音楽体験の中でのリズムカルな身体運動の効用についての注目もされていた。1986年にはこの講座が国立大学では唯一の音楽・ダンス・セラピーをその内容とする学科目として採用されたということである。

Hörmann は、隣接あるいは連続線上にある領域としての音楽とダンスの両方を重視し、実践・研究活動を行ってきた。著書の中でも、能動的音楽活動をダンスとみなすこと、ダンス心理学を発端としてダンス・セラピーがあると示し、また運動観察とこれによる分析を重視している。アメリカやドイツのダンス・セラピー協会／連盟で養成や実践の中で義務づけられているラバン式運動分析を参考にした独自の的方法論、絵画を通した評価方法も紹介される。

ダンス・セラピー発展の背景については、必ず取り上げられるヴィグマン、ラバン、ダンカンらに加え、デルサルト、メンゼンディーク、ダルクローズといった体操の系譜についても丁寧に繙いている。

分析的研究方法論や、レンガをひとつずつ積み上げるような論展開をする一方で、セラピー実践においては、ダンスの中で生じる美的経験の積み重ねをいかに生かすか、を最大の課題とする、と述べる。

9) Petra Klein, *Tanztherapie - ein Weg zum Ganzheitlichen Sein*, Pfeifer, München, 1993

本書はダンス・セラピーの背景となった諸理論、ダンス・セラピーの機序と方法論を綿密に紹介しており、深層心理学と人間性心理学の融合によるホリスティック理論からのアプローチを試みている。筆者も前書きで書いているが、ダンス・セラピストを志す人々への教科書でもある。

本書を著わした Petra Klein はもともと心理学を修めており、1983年にニューヨークでダンス・セラピスト (DTR) の資格を取得してドイツに帰国。ドイツでのダンス・セラピー紹介と実践に力を注

いできた。多くの先駆的ダンス・セラピストが、教育者としてダンス・セラピーの可能性に思い当たったことから実践を試みはじめたのに対し、Klein は自分の病的側面と現実生活との橋懸かりとしてのダンスを意識化してダンス・セラピーの取り組みを始めている。

"Institut für Tanztherapie Hamburg, ITTH" を創設し、ハンブルクで実践と教育を行っていたが、1994年以降、本拠地をスペインに移した。ダンス・セラピー関連のワークショップ、講座、会合、プライベートセッションのほか管理職等を対象とした、心身の関係に根ざした指導法のセミナーなど様々な臨床心理学領域のセミナーやワークショップをおもに休暇を利用した合宿形式で開催している。また、ダンスや他のパフォーマンスのためのコンサート会場、合宿の会場などとしてのサービスも提供する。

10) Gabrielle Roth, *Leben ist Bewegung; fünf radikale Wege zur Selbstbefreiung*, Wilhelm Heyne Verlag, München, 1998 (本書は1997年にアメリカで出版された *Sweat Your Prayers*, Putnam, New York の独訳版である。)

筆者は演劇及び舞踊の指導者で、自己啓発の方法として独自の的方法論を展開してきた。特に医療・特殊教育というものではなく、一般向けといたところである。言葉遣いが少々カルト風なので、怪しむ向きもあると想像されるが、体験者としてはその方法論について納得できるものがある。

紹介者は、7年前にオランダ、ユトレヒトで Roth 方式のオープンクラスを体験した(雑居ビルのダンススタジオで Roth の直弟子により定期的に行われていた。対象者についての条件/記述は特でない)。本書にも示されているが、まず呼吸と身体の意識を覚醒させる入念な導入があり、その後 Flowing, Staccato, Chaos, Lyrical, Stillness という「5つのリズム」を1時間以上かけて次々と踊り、最後に言語的に振り返りをする、というものであった。導入と転換点の簡単な指示以外はほとんど言語化はない。リズムと表現されているが、これらは動きとそこで流れてくる音楽の質を示している。

11) Totem; *Gelebter Schamanismus* (原題 *Maps to Ecstasy*), Wilhelm Heyne Verlag, München, 1990においても説かれているが、Roth にとってダンス・セラピーは一種の儀式であり、人生(一生)を映し出す旅のようなものである。先述の5つの質は人生の局面、自我への課題とも相応しており、また同時に、これらを注意深く身体的にたどってゆくことで、自己の深層に眠る問題を発見したり、癒したりできる道具になっている。

また、Roth は独自に作曲したセッション用音楽

を CD として欧米で出版しており、すでに5シリーズを数える。

12) Elain V. Siegel, Sabine Trautmann-Voigt, Bernd Voigt, *Analytische Bewegungs- und Tanztherapie*, Ernst Reinhardt Verlag, München, 1999

本書は1997年に Fischer Taschenbuch Verlag から出版された *Tanz und Bewegungstherapie in Theorie und Praxis* を、どういう事情でか出版し直したものである。

第一筆者の Siegel はアメリカのダンス・セラピーが定着するのに貢献大であった第2世代の人物である。当初から精神分析との併用など、精神医学領域に足場を置いて活動をしている。ドイツにおいては他の2名の筆者とともに Deutsches Institut für tiefenpsychologische Tanztherapie und Ausdruckstherapie e. V. の代表者である。

本書は次のような3部からなる。第1部: 身体におこる様々な現象の深層心理学的解説, 第2部: 事例を紹介しながら、セッションの中で生じる動き(ダンス)を「夢」と同じ働きを持つものとみなし、言語、非言語の両方で本人とともにその意味を繙いてゆく「精神分析的ダンス・セラピー」の内容を提示, 第3部: 「ダンス・セラピーの根源的姿から」と題され、創始者マリアン・チェイス式グループセッションによる事例を紹介しながら、ダンス・セラピーの基本的特性とその重要性について振り返る。

雑誌論文、学位論文等は別の機会に扱おうと思うが、関連学術誌では、Deutsche Gesellschaft für Tanztherapie の発行する "FORUM(1984年 Info として創刊, 2000年から改名, 年1回発行)", Deutsches Institut für tiefenpsychologische Tanztherapie und Ausdruckstherapie の発行する "Zeitschrift für Tanztherapie und Körperpsychotherapie (1994年創刊, 年2回発行)", Akademie für Musik- Tanz- und Kunsttherapie が発行する "Musik-, Tanz-, und Kunsttherapie- Zeitschrift (1989年創刊, 年4回発行)" などがあつた。このほか、"Praxis Pchycomotorik", "Integrativ Therapie" 等の臨床心理系の学術雑誌にも時折関連論文が掲載されているほか、体育大学、教育学部、あるいは音楽大学の中の舞踊教育課程や、特殊教育の課程を経てダンス・セラピーをテーマとした卒業/修士論文や、臨床研究による博士論文が執筆されている(ケルン体育大学では1984年から1~2年に1~2本の頻度でダンス・セラピーに関する卒業論文が執筆されているほか、博士論文は1989年フランクフルト大学から始まり2002年末現在で8本)。

(八木ありさ)